

ユニコーンによろしく

水上 洋子 Yoko Minakami

ユニコーンによろしく
水上洋子

ユニコーンによろしく

第一刷発行——1988年10月26日

定価——980円

著者——水上洋子 ©Yoko Minakami 1988. Printed in Japan

ブックデザイン——スタジオ・ギヴ／写真——佐野篤

発行者——小高民雄

発行所——東京書籍株式会社

東京都台東区台東1-5-18 電話942-4111 (営業) 942-4173 (編集)

印刷製本——図書印刷株式会社

ISBN 4-487-75205-1

TOKYO SHOSEKI PRESENTS.

捕えられるとたちまち死んでしまうという伝説のユニコーンよ。

おまえなら知っているだろう。

愛のはじめには

空にとき放たれたような“自由”を感じるのに

次の瞬間には

身も心も地上の重い鎖につながれてしまっているのは何故なのか。

ユニコーンに
よろしく

序章

会わないうちに、記憶は甘く美しいものに変えられる。

再会がときとして感動的なのはそのためだ。

なんと哀しいことに、失わなければ、人は優しくなることができないのだ。
決して失わないままに優しくなれる方法はないものだろうか。

彼女から写真展の招待状が届いたのは一週間前の雨の日だった。遠い昔の想い出をぼつりぼつりと語っているような雨音を聞きながら、私はペーパーナイフで封筒の端を切った。中からは銀色の砂目模様のカードがあらわれ、invitation——Moon Illusion^{月の幻影}と記されていた。渋谷のフォトサロンに足を踏み入れた途端、私の白いワンピースは青白い光に染まった。そこはビルの二階にある一室というより、月の光に充ちた庭園^{パティオ}のようだった。

L字形の会場の曲がり角あたりには大型のスクリーンがすえられ、スチール写真をもとにつくられたビデオがまわっていた。

天井のあちこちに吊るされている青いスポットには細工がしてあるのだろう。樹木の枝や蕨の葉などの影が壁や床に広がっていた。

訪れた人は、あたかも暗い葉陰からかい間みた光景のようにして、深いグリーンのパイクを駆っていく若者の姿や、けだるげに曇った鏡に向かってルージュを引く女、女の腕の中で眠りこんでいる男、などの作品に出会ったのだった。

これらの展示物はスポットライトのせいでは定かには判明せず、一応に青い紗のベールがかけられたようにみえていた。だがそんなことには一向にお構いなし。大切なのは全体的な雰囲気なのだと言いたげ。いかにも彼女らしい演出だった。

さしずめ青いスポットなどは、彼女みずからがこの催しのために特別にあつらえて配線したものでろう。だとしたらこのサロンの厳格なオーナーをかなり強引に説得したとみえる。

ふだんはとても優しい、気のいい女なのに、いったん仕事のこととなると人が変わったように我儘になるのが彼女だった。

一見したところ、彼女の巧みはおおいに成功したようだ。

このオープニングパーティーの会場に集った人々は、彼女が仕組んだ「月の光」の魔術にかかっていた。それぞれ、どこか恍惚とした幽玄な表情をたたえて、ゆったりとした足どりで往きかっていた。

ある者は一人、じっと作品と向かいあい、カップルで来た人たちは森の中を散策しているような親密さで頬を寄せ、あちこちで立話をする人たちの声にさえ、ひっそりとした調子があった。

私は小さなノートを小脇にし、片手にワイングラスを持って会場をめぐり歩いていた。

月影が映っている窓、アーチの門からでてきた黒い服の女、銀色のシャワーの雨を浴びている若者、などの作品のひとつひとつについてちょっとしたメモをとってゆく。

私は雑誌社にこの個展について批評を書いて送る予定だった。偶然そんな仕事を依頼され

たのだが、彼女について記事を書くことは私にとって、ある感慨を呼び起こさずにはいなかった。

ちょうど今しがた、今宵の女主人公である白尾麻也の姿が私の視界に入ってきた。

人々の間を縫ってこちらにやってくる彼女ははっとするほど美しかった。彼女は肩が露わになるエスニックふうのドレスをまとい、耳もとにはラビス・ラズリの青く光る石が揺れていた。

白尾麻也は私とは年齢が七つも上だが、以前は親友と言ってもいいほどの仲だった。けれどある時期を境に次第に会うことは少なくなっていくた。最後に二人が会ったのはもう二年前の夏だった。

あのとき、彼女はフォトグラファーとしてはスランプでやることなすこと裏目にでていた。ある広告代理店に依頼された仕事ではるばるインドネシアの島にでかけて撮影したものが、ボツになったこともあった。

私と彼女が疎遠になってしまったのも、そういった一連の不幸な日々間に起きたちよっ

としたいさかいなどが原因だった。私は彼女のことを気にしながらも少し距離を置くことを選んだのだった。

それまで常に自分の賛美の対象であったものが、不機嫌になりくずれてゆくのをみているのは辛かった。振り返ってみると私はいつも彼女の追随者だった。どこかでそんな役目にもうんざりもし、自分自身をみつめ直すことの必要も感じていた。

その頃、麻也はいくぶん太って、目の下に黒ずんだたるみがでていた。三十四歳という年齢にしてはぞっとするような老けこみ方だった。

それが今はどうしたことだろう。冴え冴えとして若々しく、ほっそりとしていた。個展の主催者として彼女が振りまく微笑には誰もが魅きつけられるようだった。何故ならその微笑には尋常ではない優しさがたたえられていて、彼女が何かに捧げられた犠牲めいたものであるかのようにさえみえたから。

「どう思っ、今回の私の作品は」

彼女が私の腕をとりながら声をかける。

「批評を書いてくれるんでしょう。嬉しいわ、あなたに書いてもらうなんて」

「とてもいいわね、もちろんお世辞抜きでね。いったい何があったのかしら、と思うほど、

「一点一点がオーラを放っているわ」

確かに今回の個展は質が高かった。二年前のスランプのときとは雲泥の差だ。いったい彼女はどうかやってあの悲惨なスランプを抜け出したのかしら……。とくに、女性の腕の中でも、どろんでいる男の上半身をクローズアップした作品が私は心に残った。

画面を斜めに切る形で、若い男は横顔をみせて眠っている。彼の頭はしなやかで優美な女の腕に支えられていた。女の胸の下あたりに額をつけて安らいでいる男の顔は、なにか生まれたばかりの動物の子を連想させた。まだ自分がどんな生物であるかさえず自覚しないまま、もやもやとしたピンクの雲か何かのようにして眠っている無邪気な男の顔は、私をひどく魅了した。

あんなふうに愛する男が自分の傍らで眠ってくれたなら、どんなに穏やかで優しい気持ちになれるだろう。

彼女はにっこりとして言う。

「友達だからって遠慮はいらないわ。あなたが思ったとおりに書いて」

私は、彼女の繊細な線で出来た顔と、その顔の両側で揺れている涙形のラピス・ラズリのイアリングにみとれている。彼女のいくぶん青色い肌は以前にも増して透き通り、その石が

まるで彼女の内側からでてきたもののように似合っていた。

「でも曖昧なのは駄目。誉めてくれるのでなければ徹底的に酷評するか、どちらかにして。だつて悪評も評判のうちだもの」

私は、とんでもない、と首を振る。

「もし私が、今回のあなたの作品について悪く書いたら、批評家としては見る目がないと思われてしまうわ」

「ありがとう。本当のことを言う私、とても自信があるのよ、この個展は」

私は、ふいに彼女の眼が私の肩越しに誰かを追っていることに気づく。それとはわからぬようにして、彼女は上の空の表情でそちらに向かって目だけで微笑みかけている。

ラピス・ラズリがさらに青みを増したようにみえた。

途端に私は奇異な感覚を覚えた。

今、眼の前にある光景は確かに以前にみたことがある。確かに……。青く暗い光の中で影絵のようにして往きかう多勢の人々、私の前には彼女がいて……。青い石のイアリングをした

彼女は誰かをみている。そう、三日前にみた夢の中の光景じゃなかったかしら。それよりもっと前？ わからない。でも確かなのはここで私が振り返ることだった。その先がどうなるのかは覚えていなかった。

少しの間、私は金縛りにあつたように動けなくなっていた。その間に彼女は、たまには乃木坂にあるマンションに遊びに来るように、と告げて行ってしまった。

私は背中で誰かを捜していた。その誰かもまた私をみているのを感じていた。

少しずつ、まるで氷が溶けてゆくかのように、ゆっくりと私は振り返った。

先刻、彼女が眼で追っていた相手はすぐに彼女だとわかった。

遙か、人垣の向こう側にいる一人の青年。

彼はあきらかに今まで私に眼を注いでいたのだが、すぐにそしらぬふうで視線をそらした。柔らかかそうな、いくぶん茶色がかった髪。横顔の輪郭は繊細で甘い線を描いている。私はひどく魅きつけられた。

こちらをみて……！

私が心の中で彼に囁きかけると、彼はそれとおりにした。彼は真正面から私をみつめた。といっても、その眼差しは私を通り抜けてここではない別の世界をみているようでもあつ

た。

光線の加減によって緑が緑がかったようにみえる澄んだ栗色の瞳。体中がひきしまり、鳥肌立つような感覚がのぼってくる。その眼差しの中で私は自分がにわかに美しくなるのを感じた。辺りの光景が急速に遠去かってゆき、一瞬、ここに二人きりであるような錯覚に陥った。まるで薄い月の光に照らされた森の中で、一匹の美しい獣、たとえば鹿か何かの動物にでくわしたような心地がした。

彼は踵を返した。

水の上を滑ってゆくような足どりでビデオが動いているコーナーの角を曲がって、彼はたちまち姿を消した。

しばらくの間、私はその場に立ち尽くしていた。

私は少し前に私のみたものが幻のようにも思えてきた。それはあの瞳のせいだった。あんな眼差しをした人間がいるなんて……。

一步踏みだした途端、私は焦りだしていた。

もう一度彼に会えるかしら……。

私は人をかきわけコーナーを曲がったが、彼の姿はもうなかった。その先は、主催者の控

え室ともう一方の出口があった。

行ってしまったのかしら……。

私は諦めきれずに、人々の顔に視線を移していった。

そのうちにはっと思ひあたった。

そして私は、いくつかの彼をみつけた。壁に飾られた展示物——緑色のバイクを駆ってゆく男、シャワーを浴びて裸の背中をみせている若者、それから、あの無防備な寝顔をみせている青年。それらは同じ一人の男であり、たった今、この場において消えた、あの若者であることに私は気づいた。

最初、すぐにそれとわからなかったのは、その写真の一点一点の表情がひどくかけ離れていたからだ。いったい彼はいくつの顔を持っているのかしら。

緑色のバイクの青年は、これから自殺でもするのかしらと思うほどこの上なく陰鬱にみえた。シャワーの若者はいつも悪戯^{わるそく}けの種を考えださずにはいられない、陽気な人間のような印象を与えた。

作品を眺め渡しているかぎりには、とうてい一人の人間とは誰も見抜けなかっただろう。

私は喉の渇きを覚え、急いで新たなワインをとりについた。柱の陰で隠れるようにして一

息にあおったが、胸の鼓動を抑えることはできなかった。

私はにわかにあたりが心もとなくなつてゆくのを感じていた。どうやら私は迷いこんでしまったらしい。三日前の夢の中に……。もう永遠に現実の世界には戻れないような、不安な心地さえした。

化粧室に行き、私は自分の姿を確かめた。白いドレス。二十九歳の、充分美しいといつていい、女の顔がそこにあった。